
神々と世界の日常

中津 久仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々と世界の日常

【Nコード】

N3587Q

【作者名】

中津 久仁

【あらすじ】

ギリシャ神話・北欧神話・ケルト神話・日本神話・エジプト神話……世界にはたくさんの神話がある。そして……

学校で

起きる神話だつてあるのだ。

新学期と転校生

チツチツチツ、ジリリリリリリ、バン！ドン、ジリーーーーン！
「・・・朝か」

そう言っ て女は目を覚まし、けだるい体を起こした。

女が今しがた自分で壊した目覚まし時計を見れば、時刻は朝の7時30分になっていた。

「飛鳥あ、そろそろ起きなさい。今日から新学期でしょ？」

下の階から、彼女の母親の声が聞こえて来る。

そう、今日は9月1日。すなわち2学期が始まる日である。

「わかってるって」

と飛鳥と呼ばれた女は返事をして、着替えを済ませ、階段を下りた。

「そうそう、きょうからアンタの学校に転校生が来るわよ」

朝食を机に並べながら母親が話しかけてくる。

「・・・何でそんな事知ってんの？」

「この前となり引越した来た家の子が中学生だったから。男の子よ」

「へえ、中2かな？」

「そういつてたわよ」

「同じ学年か」

「さ、それはそうとさっさと食べちゃいなさい。委員長が遅刻なんかしちゃダメでしょ」

「はい。・・・ん？」

――9月1日・・・新学期・・・委員長・・・

「ああ！」

「どうしたの？」

「今日、準備があるから早めに行かなきゃだった！」

言っ が速いか、彼女は急いで朝食を平らげ、玄関へ行った。

「曲がり角に気をつけてね。ラブコメが始まるかも」

「何バカな事言ってるのよ。いつてきまーす！」

「んじゃ、行ってくる」

家を出た彼女の目に映ったのは、同じく家を出たところであろう少年の姿だった。

「ーああ、これが隣に引越してきた子か

ーとりあえず、挨拶するか

そう思って近づくと、少年の前に黒い犬がいるのが見えた。

犬は主人の言葉を理解しているかのように『ワン!』と鳴いた。

「よし、行くか。・・・っておわあ！」

少年は急に人が現れた事に対して驚いたようだ。

「おはよう！えっと、・・・」

「ー名前何だつけ？」

「ああ、お隣さんか。俺は夜月神弥^{やつきしんや}。アンタは？」

「私は守園飛鳥^{もりそのあすか}。よろしくね、夜月君。」

「うん、よろしく。えっと、同じ学年？」

「中2だよ。どのクラスとか決まってるの？」

「えっと・・・3組」

「マジ!? 同じクラス!一応委員長です」

一通りの自己紹介が終わった後で二人は歩き出した。

「犬飼ってるんだ? いいなあ、名前は？」

「それが決まってるなくてさ。会議はしたんだけど」

「どんな名前候補が？」

「まず最初に『クロ』」

「安直だね」

「次に『ブラック』」

「またそのままだね」

「更に『シリウス』ときて」

「嫌な予感がする」

「最後が『シリウス・ブラー』」

「はい、ストーリーアップ！」

危うく某魔法少年の名付け親の名前が出るところだった。

「つー訳でアレの名前は絶賛募集中です」

「考えとくわ」

そのあと十分ほど話をして、二人は学校へついた。

「やっぱ、学校近いのは良いな」

「前は遠かったの？」

「自転車で三十分ほどかかりました」

「うっわ、キッツ」

「山奥だったからな」

「大変だったんだね」

「そりゃ、もう。ああ、俺職員室行かねばなんから」

「あつ、そう。じゃーねー」

そうして二人は分かれた。

一人は懐かしい学校生活を思い浮かべながら。

一人は新しい日常に期待と不安を抱き。

しかし、両者にも期待どりの日常は訪れなかった。

クラスメイトと物語の始まり

「今日からこのクラスに転校生が来ます」

担任である桜木先生（女）の一言で教室がざわめく。

「男？女？」「外国人？」「宇宙人？」「超能力者？」「ただの人間には」「女なら興味あるぜ！」

生徒たちの声を聞いてウンウンと頷き、

「という訳でどうぞ！」

「「「全部スルーされた！？」」「「「「

そのクラスに緊張した面持ち少年が足を踏み入れる。

「初めまして！夜月神弥です」

「「「ちつ、男か」「「「

「それが転校生に対する態度か！？」

「ふつ、甘いなお前ら」

突然、男子生徒がクラスに呼びかける。

「男装女子という可能性になぜ気づかない！」

「「「な、なんだってー！！」「「「

「ねえよ！そんな可能性！」

担任はその様子を見て、

「守園ちゃん、後はよろしく」

丸投げした。

「分りましたあ」

守園は夜月の隣に立ち、手をたたきクラスを鎮める。

「さて、・・・何をしようか」

「とりあえず、クラスの奴らを紹介してくれ」

「それならオレの出番だな」

そう言いながら、さっきの失礼な男子生徒が夜月の隣に立つ。

「じゃ、よろしく。ロミオ君」

そういつて守園は自分の席に戻った。委員長としての仕事はまるで

していない。

「ロミオ？」

「イエース。オレは愛川留美夫あいかわるみおという。下の名前が転じてロミオになった」

「へえ、なんか『留美夫』って女みたいだな」

愛川は大げさに肩を落として理由を語る。

「生まれるのが女だと思ってたんだと。で、『留美』にするつもりが男だったんで勢いでこうなった」

「なんかかわいそうな理由だな」

「ああ、でも、まあまあ気に入ってるよ」

そう締めくくって愛川は本来の仕事が始める。

「じゃあ早速、転校生への質問タイムといきますかー！」

「お前らの紹介をしてほしかったんだが？」

「細かい事は気にしない。これ、このクラスで生活するコツ。質問する奴は適当に自己紹介しろよ」

クラスへ呼びかけたが、反応はあまりなかった。

「ふむ、じゃあオレが質問してやろう」

「何で偉そうなんだよ」

「まずは無難に・・・彼女はいるか？」

「その質問の何処が無難だ！？」

思わず叫んでしまった夜月に対し、愛川は反省なしに話をする。

「エロい経験はあるか？の方がよかったか？」

「もっと悪いわ！てかある奴なんかいねえだる中2で！」

若干赤面してしまった夜月だったが、愛川は全く気にしない。

そして、空気がほぐれてきた事もあって、手を挙げる者も現れた。

「ども、副委員長の長田勇樹ながたゆうきです。得意な教科は何ですか？」

「そうだよ！そういうまともな質問が欲かったんだよ！」

「さっさと答える」

「お前は黙ってる。得意な教科か・・・英語だな」

「あー、英語は苦手ですね俺」

「・・・無いけどさ。ええい！それより質問！平凡だからこそその技を見せてやる！」

息を整え、佐藤は質問をする。

「前の学校のあだ名はなんですか？」

あだ名。

初対面の相手に対してはかなり効果的な質問。

なんせ、『あだ名で呼び合ってる奴らは仲がいい』という錯覚を周囲に植え付けるほどだ。

そして、それに対する返答は、

「前の学校では『カミサマ』と呼ばれてました」

『コイツ馬鹿か』という疑問を周囲に植え付けた。

「お前ら『コイツ馬鹿か』って思っただろ」

全員が一斉に目をそらした。

「全員かよ！？まあいいや」

微妙な空気になってしまった。

「よし！次行こう次！」

愛川ががんばって声を出す。

「ん？なんだ？」

指をパチンと鳴らし、一言。

「Let's 下校」

チャイムが鳴った。

「カミサマは無いんじゃない？夜月君」

からかうような声にため息まじりに答える。

「いやいやマジだって。本当にそう呼ばれてたんだって」

二人の前を車が通る。

「そっぴやさあ・・・」

夜月がニヤツ、と笑い反撃に出る。

「何？」

「お前、長田の事好きなの？」

「ふえっ！？ なな何でそんな事！？」

想いつきり動揺してしまう守園。

「あっはっは、照れちゃってえ」

守園の背中をたたく夜月。

ここで、Q & a m p ; Aのお時間です。

Q 現在の状況は？

A、帰宅途中。ちなみに信号待ち

Q 動揺してる人間の背をたたくと？

A、前にふらついたりはするかもしれない

Q 結構なスピードを出しているトラックに人がぶつかると？

守園の頭に浮かんだのは「あ、死んだ」というあっさりした感情だった。

何も無かった。

気づくとそこにいた。

死後の世界だと言うのにあたりは真っ白だった。

そして、歩いていった。目的地は分からなかった。

「私、死んだんだ」

不思議な事に、死んだ事に対する怒り、悲しみは無かった。むしろ、眠りにつく前の穏やかささえあった。

――それにしても、何処まで歩くんだろう？

そう考えた時、目の前に扉が現れた。

ノブが二つある、両手であける種類のものだった。

――これを開ければいいのか

ノブに手をかけ引こうとした瞬間、背後から怒声が鳴り響いた。

「ちよつと待ったあ！！」

振り返ると、そこには少年が立っていた。

少年は真っ白な世界には似合わない真黒な服に身を包んでいた。頭の上からフードをかぶり、地面に引きずるほど長いマントを身につけているので顔以外は確認できなかった。

「夜月君？」

にもかかわらず、一瞬で正体を見破られた夜月は緊張した声で命令する。

「その扉から手を離せ、そいでこっちに来い」

「なんで？」

「何でつてお前、お前を生き返らせるために決まってるんだろ」

冗談にしか聞こえなかったのか、守園はくすくす笑った。

「生き返らせるって、何様？」

「神様」

即答だった。

やはり冗談に聞こえたのか、守園は笑いながら言葉を返す。

「じゃ、生き返らせてもらおっかな」

それを聞くと夜月はほっとため息をつく。

「それじゃ、君は今日から悪魔です」

「え！？」

驚きの声も無視して夜月は恭しく一礼する。

「それでは、よい人生を」

ベッドの上で目が覚めた。

「あれ？いつの間に寝ちゃったんだろ？」

「ーいや、確か」

「トラックに跳ねられて・・・それで・・・」

「ああ、やつと目が覚めた」

突然の声に振り向くと、ほっとした顔の夜月が立っていた。

「ちよっと待って！何で夜月君がここにいるの？いや、それより・・・」

守園の声を夜月は手で遮る。

「分かってる。お前の言いたい事はよく分かる。俺も昔はそうだったさ。結論から言うぞ」

目をそらし、息を吸って、たった一言。

「俺、死神なんだよ」

転校生の正体と奇妙な世界の面々

「は？シニガミ？」

「そのとおり。死の神と書いて死神、お分かり？」

当然のように話されても困る。

「すいません、それを信じると？」

当然の反応。

「お前だって分かってるだろ？お前は死にかけた。それで、俺が力を使って助けた」

当然の事実だとは認められない様子の守園。

「だって、この世に神なんている訳がいる訳が無いじゃない」

「なんで？」

「なんでって、そりゃ、非科学的というか・・・」

子供をあやすように夜月は話す。

「科学つてのは、理解不能な事を解き明かすためにあんだよ。非科学的だからつてのは存在を否定する理由にはならない」

「・・・じゃあ証拠は？何かある？」

夜月はあごに手を当てて、ふむ、と考える。

「お前が生きてるって事は証拠にならないか？」

「全部夢かも知れないじゃん」

「んじゃ・・・俺の家来いよ。証拠を見せてやる」

夜月はにやつと笑った。

着替えた守園が夜月の家に行くと、いきなり証拠に出迎えられた。

「いやあ、旦那が女連れ込むなんて珍しい」

四角いテーブルを挟むように夜月、守園が座っている。そして、守園の右隣、夜月から見て左隣に朝見かけた黒犬が行儀よく座っている。

クーラーが適度に効いており、夜月は快適な気分になっていたが、

反して守園は苛立を消せずにした。

「それにしたって旦那は前例がない事をやるのが趣味なんですかい？いつもいつも、その後始末にどれだけ労力がいると思ってんですかい」

夜月は申し訳なさそうに頭をかく。

「いや、俺だつてやめようとは思ってんだよ。しかしだな、仮にも神が人殺しなんてカッコつかねえだろ」

「死神が何を偉そうに」

守園がわなわなと肩を震わせているのに気づいた夜月が声をかける。

「どした？なんかものすごく怒っているような」

「そりゃ、いきなり男の家に連れ込まれちゃ怒りやすよ」

「いやいや、連れ込んだとかじゃなくて」

会話に、ついにかんしゃくを起こした守園が割り込む。

「ストーーーーーッブー!!」

説明をしようとする夜月の声に守園の声が割り込む。

守園はビシッ！と犬を指差し、

「なんで犬が喋ってんのよー！？」と喚いた。

「喋れるからに決まってるやすぜ」

平然と答える、犬。その犬を夜月もビシッと指差して、

「はい、証拠」と言った。

森園は犬の体をあさったが、テープレコードも何も出てこなかった。

「とりあえず、自己紹介しやす。アッシは冥府の番犬、ケルベロスでございやす」

「・・・ハア？」

あきれたように守園が首を振る。

「ケルベロスって3つ首無かったっけ？」

「逆に聞くけど、3つ首ある奴が歩いてたらビビるだろ」

む、と守園は黙ってしまふ。

「はあ、なんかもう現実味無さ過ぎ」

「バーカ。現実リアルに現実味リアリティなんか求めてどうすんだよ」

「・・・確かに。」

そういつてから守園は大きくため息をついた。

「わかった。認める。よくわかんないけど」

それを聞いて、夜月は意外な顔をする。

「受け入れるの速いなー、お前」

「夜月君が言っただんじゃん」

夜月が昔を懐かしむように上を向く。

「俺は1年と半年かったからなー」

「それは時間かかり過ぎでしょ」

「だってさ、『世界の命運アンタにかかってるからよろしく』って言われたんだぞ」

ずいぶんと適当な告知である。

そういえば、と守園は首を傾げる。

「悪魔って何するの？イメージとしては魂の取引とかなんだけど」
守園の疑問に夜月は首を振る。

「んな事ああんましねえよ。大体、悪魔なんて今時信じてんのか？」

「いや、私がそうなんですよ」

呆れたので、立ち上がって家に帰ろうとする守園。

「ああっ！ちよっとお待ちください。決してお時間かかりませんので」

必死に守園の行く手を夜月が阻む。

「ちよろつと報告に行かねばなんのですよ」

「何を？何処に？」

「新入りの悪魔のことを、神の世界に」

「・・・、神の世界って、どうやって行くの？」

「俺が扉を開ける。それだけ」

そついうと夜月は自分の目の前に手をかざした。

「ひらけ、ゴマ！」

ふざけた台詞が放たれると、目の前に扉が音も無く存在した。

「え？なに、どうやったの？」

「まあまあ。細かい事は気にしない」

笑いながら、夜月は扉を開けた。

「行つてらっしゃーい」

後ろで犬が言うのが聞こえた。

「えっと、またここ？」

守園がそういうのも無理は無いだろ。なんせ、扉の向こうは、先ほど見た真つ白な世界だったからだ。

しかし、先ほどと違う点は、異常なほどの数の扉が存在している事。そして、その扉の一つ一つが、大きさも形もバラバラである事だ。

「せーんせーい。質問でーす」

守園がしゃきつと手を挙げながら言う。

「はい守園さん」

夜月が指で守園を指す。

「ウザいくらい扉がありますけど、何？」

「それはな、・・・」

「それは？」

「よく分かつてません！」

開き直った夜月に対し、守園は、ええー、と言いたげな顔をする。

「しゃーねえじゃん。まず開かねえし」

「ええー」

結局言つた。

「ヒヤハハ、分かつてんのもあるけどなあ」

「あ、そうなんですか？」

「例えば、その真つ白の奴の向こうは只こつちを見てるだけだからねえ。通称『覗き穴』」

「ええー。気持ち悪い」

「はい、そこ。知らない人に会話のペース持っていられるな」

夜月がたまらずツツコミを入れる。

「ヒヤハハ。まあまあ、死神殿。女つれてるなんて珍しいじゃないか」

突然現れたその男は全く悪びれる様子もなく喋っている。

その男は、褐色の肌にボロボロの布をまとっていた。目は赤く、髪は砂漠のように乾いていた。

「で、どちら様？」

男は自重気味に笑いながら自己紹介した。

「ヒヤハハハハ。俺様はロキ。ずる賢さの神であり、最高にして最低のトリックスターだ」

夜月がやれやれと肩を落とす。

「でさあ、俺がわざわざこつち来た用件なんだが」

夜月の説明に先回りし、ロキが語る。

「その女を殺しちまったから生き返らせるために悪魔にした。そんなところだろう？」

実に楽し気な口調だった。

「お前どつかで見てんのか？まあ良い。後何人かに言うつもりだけど」

「・・・それならとりあえず・・・」

ロキは夜月の後ろをさし、

「後方注意だねえ」

「死ねえええええ！死神いいいいいいい！」

怒号が鳴り響いた。

「おわつとおおおお！？」

夜月があわてて横へ飛ぶと、さっきいた場所を5メートルを優に超す巨大な剣が振り下ろされた。

「ちっ、外したか」

突然襲いかかってきた男が剣を構え直すと、剣は普通の大きさ――
ーといっても2メートル強ほどだが――に縮んだ。

「おいおい、危ねえじゃねえか。死んだらどうしてくれんですかあ
？」

夜月がおどけた口調に怒りを混ぜて話す。

「あのさあ、本気でやるんだったら結界張りたいからちょっと待て」
ロキがため息をはきながらつかれた調子で告げる。

「ふん、良かるう」

男が鼻を鳴らして答える。男の出で立ちは、血のように真っ赤な鎧
をつけているだけだった。

そう聞くとロキは、黒いチョークを取り出し、それで守園と自分
を囲むように円を書いた。

「これで良っし、と」

その間に、夜月はゴソゴソとマントの中を漁り、少し大きめのビ
ー玉のような物を取り出した。それを手の中でもてあそぶと、夜月
の手に大剣が現れた。

「え？なにになに？」

「まあ見てな。絶対この円からでないように、死ぬから」

守園にロキが注意している間に、二人の剣士はじりじりと間合い
を計っていた。

「はあああああっ！」

二人の足下が爆ぜる。

「な、何やってんの。あの人たち」

「んー、じゃれ合い？」

神のじゃれ合いは剣がぶつかる衝撃波で地面がえぐれるらしい。

「おらおらおらあ！」

「甘いつつてんだよお！」

大きなガン！という音で二人の剣士は一気に距離を取った。

「覚悟しろ、死神イ！」

「吹っ飛ばしてやんよ」

鎧の男は剣を構え直すと、「ハアアアッ!」とか言って気合いをため始めた。

「すみませーん。何かどす黒いオーラが見えます」

守園が言つと、ロキは感心した声を出した。

「また新しい必殺技かねえ。さてさて、死神殿はどう出るか」

夜月は相手の様子を見て、

剣をぶん投げた。

「おわあああつ!？」

鎧の男があわててかわすと、目の前に影絵の狐のような構えの指、つまりはデコピンをしようとする夜月の手があった。

「ぶっ飛べ!」

「はああああああああああ……!？」

結果、鎧の男はどんなに守園が目を凝らしても見えなくなつてしまった。

ロキが手を叩きながら夜月に歩み寄る。

「これで9連勝だっけ？」

剣を拾いながら答える。

「10連勝だ」

「ていうか、必殺技のため時間に攻撃、つてのは反則じゃないかなあ」

「敵の目の前でやる方が悪い」

二人に守園が駆け寄る。

「何だったの、今のって」

「気にしたら負けってことで」

ロキが鎧の男が飛ばされた方向を向いて、目を細めた。

夜月がその方向を見ると、さっきの男が猛スピードで突進してくるところだった。

「主人公の変身中と必殺技のため時間は攻撃するなと習わなかったかアああ!!!」

こいつは一回叩きのめした方が良いな。

そう夜月が確信した時、新たな声が天から届いた。

「やつ、やめて下さああああああああいッ!!」

二人の動きが止まる。

守園が声のした方を見ると、そこには空に浮かんでいる5歳ほどの少年がいた。

「え!？」

守園が驚愕したのは、少年が浮かんでいる、と言う事ではなく、その姿だった。

少年は、幼いが故に男女の区別が付き難く、真っ白な布に身を包み、金色の髪と瞳、そして、背中に大きな翼を生やしていた。

科学的に考えれば絶対にあり得ないその姿だが、そんな常識など知らん顔で少年は翼をはためかせている。

「なんだ、貴様が」

男がつまらなそうに舌打ちをし、夜月の胸元までのびていた剣を腰に差している鞘に収める。

「ああ、お前かよ」

夜月は小動物を愛でるように微笑み、男の喉を突いていた剣を一振りし、元の黒い球に戻す。

「けんかはダメですよ」

少年はゆっくりと守園の前に降り立つ。

「えっと・・・お客さん・・・ですか？」

少年が首を傾げながら尋ねる。

「俺のクラスメイト兼新入り悪魔」

守園の代わりに夜月が答える。

「あ、そうなんですかあ。あ！自己紹介しますね、うん」

少年はこほんと咳払いした。

「ボク、ルシファーっていいいます。天使です！これからよろしくお願ひしますねっ」

ニコニコと笑いながら守園に握手を求めた。

「私は守園飛鳥。よろしくね、ルシファー君」

守園も微笑みながら握手をする。

「つーか、お前も名乗れ」

夜月が鎧の男の兜をたたく。

男は忌々し気に舌打ちをし、イライラした調子で名乗った。

「我はアレス。戦神だ」

「はいはい、良く出来ました。おいルシファー殿、わざわざお前が来たってことは、何かあるんじゃないのか？」

ロキがルシファーのあたまをクシャクシャと撫でながら言う。

「あ！そうでした！えっとえっと、ハデス様！ゼウス様から伝言です」

「ハデス様？」

守園が知らない単語に首を傾げると、ロキが「死神殿の事さ」と耳打ちしてくれた。ゼウスなら守園も知っている。ギリシャ神話に出でくる雷を使う神だ。

「『目をつむっておいてやろう』との事です」

それを聞いて、夜月は苦笑いしながら空を見上げた。

「あのジジイは何でもお見通しかあ？」

ふと、ルシファーが守園に話しかけた。

「あ、あの・・・質問があるんですけど・・・」

少し後ろめたいような顔を見せるルシファーに、守園は優しく笑いかける。

「何？何でも聞いていいよ？」

それを聞いたるしファーは急に顔を輝かせ、背伸びをして顔を守園に近づける。その様子を見た守園は、やっぱり子供は可愛いなあ、と思ったが、

「ハデス様の彼女さんですかっ？」

即、顔を引きつらせた。守園はどうすれば少年の気分を害さない返答になるかを考えたが、

「なーに言っただお前は」

夜月がぽこんとルシファアの頭をたたいたので必要なくなった。

「あうー。何するんですかー」

ルシファアが頭を両手でさすりながら夜月に突っかかる。それでもニコニコしているところを見ると、それほど怒ってもいないようだ。「何するんですかー、じゃねえよ。こいつ好きな奴いるんだぞー」

「!？」

ニヤニヤしながらさっさと大変なことを言った夜月を、守園はボカリと殴った。

「いつてえ!」

夜月が頭を抱えてうずくまる。

その様子を見ていたアレスが、呆れた様子で言う。

「惚れた男がいるのなら、さっさと接吻でも何でもすれば良からう」
完全に不意打ちだった守園は盛大に吹いてしまった。

「何言ってるんだお前はあ!」

飛び上がった夜月がアレスの頭に回し蹴りを放つ。アレスのこめかみに、夜月のつま先がのめり込む。

「ぶっ飛べ!」

アレスさんがログアウトしました

「ふう、あのバカは全く」

夜月はうまくバランスを取って地面に立つと、がっくりと肩を落とした。

「あんまり乱暴しちゃ駄目ですよ。お馬鹿さんになっちゃいます」
ルシファアが内容とは裏腹にあまり心配していない声で言う。

「アレス殿は元々大バカだからねえ」

口キが完全に見下した声を出す。

「はあ、俺、もう帰るわ。疲れた」

「ええー、もう帰っちゃうんですかあ」

そう言うルシファアの声は、アレスがぶっ飛ばされたときよりも格段に残念そうだった。

夜月はその声も無視して、掌を前に突き出した。

すると、先ほど彼らが通った扉が音も無く出現した。

それを見て、守園はある事に気づく。

「ねえねえ、「ひらけ、ゴマ！」って言わなくていいの？」

「ああ、あれ？気分」

あっけからんと言いつつ夜月に、守園は大きくため息をつく。

「それじゃ」

そういつて扉を開けようとする夜月に、ロキが突然肩をまわしてきた。

そのままロキは体重をかけ前にかがむ格好になり、夜月と背の高さを合わせる。

「何だよ」

夜月が少しイライラした顔を作る。

対するロキは、さっきまでのニヤニヤした表情を消し、真面目な顔をする。

「いやー？気づいてると思うんだけどさあ、まあ、念のために言っとくよ」

そしてロキはルシファーと話をしている守園をちらりと見て、夜月だけに聞こえる声で、告げる。

「あの女、お前が死んだとしたら、死ぬぞ」

夜月は、苦虫をかみつぶしたような顔になり、小さく舌打ちをする。

「分かってるよ、・・・畜生め」

自分の生命に関する話が行われている事も知らずに、守園は楽しそうにルシファーと話している。

「ならいいんだけどねえ」

ロキはいつものニヤニヤ顔に戻り、夜月から離れる。

「じゃあね、ルシファー君」

「また来て下さいね、守園様」

会話を終えた守園がロキと入れ替わるように夜月の隣に立つ。

「どうしたの、怖い顔して」

心配そうな顔で夜月のうつむいている顔を下から見上げて、守園が言った。その守園の顔を見た夜月は、

「何でもねえよ」

とだけ言っ取っ手をつかむ手に力を入れる。

「お体にお気をつけて」

「死神に言ってもねえ」

夜月は、二人を一度だけ振り向いて「またな」と言った。

「んじゃ、帰りますか」

「うん」

夜月は取っ手を引き、一歩、前に踏み出した。

「お帰りなせえ。つつたつても、こつちじゃ一秒たりとも進んじやいねえんですが」

守園がまず目にした物は、先ほどの姿勢のまま相変わらず喋っている黒犬の姿だった。

守園がケルベロスの言葉に首を傾げ、壁にかかっている時計を見ると、なるほど針は進んでいないような気もする。

「え？なんでなんで？」

質問された夜月は、うーんと唸りながら頭をかく。

「俺にもよく分からんけど、どうもあの空間は『時の狭間』に存在してるらしい」

「????」

そんな説明で一般人が理解できる訳も無いので、夜月は続ける。

「なんか、『此の世』ってのは限りなく無限に近い数の写真のパラパラ漫画みたいになってるらしい。それで、その写真と写真の間には限りなく零に近い隙間があって、あの空間はそこにあって・・・聞いてる？」

「ごめん無理」

身振り手振りを交えて一生懸命、夜月は説明していたが、守園は『パラパラ漫画みたいにく』のところからそっぽを向いていた。

自分でも理解できていない事の説明をさせられていた夜月は、その必要がなくなつたので少し安心する。

「で？他に質問は？」

守園はふむと考え、

「そもそもさ、『神』って何？」

夜月は逆に少し首を傾げる。

「何って言われてもなあ」

言いよどむ夜月を守園は指差して、自分の言いたい具体的なことを言った。

「じゃあさ、夜月君は人間？それとも神様？」

「んー、それに答えるにはちよつと時間がかかるな」

長くなりそうなので、守園と夜月は四角いテーブルを挟んで座る。

「とりあえず、あの扉の事は分かるか？」

「あの、死んだときにあつたあれ？」

「そうそれ。まず理解しとかなきゃならんのは、あの世界は死後の世界じゃなく、いわゆる『生と死の狭間』だ。んで、あの扉をくぐると、死の世界。そこがどうなってるのかは誰にも分からん」

夜月が一度言葉を区切り、守園の様子をうかがう。守園は黙って先を促す。

「それで、お前は扉をくぐる一手手前で『こつち』に還つて来たから死なずに済んだ。ここまではオッケー？」

「そのおかげで悪魔になつちやつたけどね」

「まあそれは置いとけ」

笑いながら皮肉を放つ守園に、夜月は苦笑しながらも話を続ける。

「まあ、こつからが本題だ」

そして、彼は自らの過去を語りだす。

「俺も昔、あそこに行った事があるだよ」

「それは・・・つまり」

「ああ、俺も昔死にかけてさ。そんな時はちょうど死神の席が空いてたんだ。んで、俺がその席に着いて、生き残ったって訳。だから、俺は人間でもあり、神でもあるってのが一番適切な答えだな」

「ん？神様って役職みたいなもののなの？」

「だな、それが結構近いかも」

「ちなみに、旦那は第2999代目でさあ」

「まあ、そー言う事で」

夜月は適当に話題を終わらせる。

そして、守園は質問をもう一度。

「それじゃあさ、普通の人でも神様になれちゃうの？」

それに対し、夜月は曖昧な返事をする。

「なれるっちゃ、なれるけど・・・普通の人ってのは」

はつきりとした答えを出さない夜月に代わって、ケルベロスが流暢に話します。

「まあ、アツシらの言う『神』ってなあ、ただ単に『神に等しい力を手に入れた人間』ですから。超能力者ですよ、扱う力が此の世を滅ぼしかねないほどの。神話の神が世界に実在するってわけじゃありません」

ギリシャ神話では、今喋っている犬、ケルベロスはあの空間にある扉の門番のはずなのだがその仕事は存在しないらしく、結果、死神と一緒に居るだけと存在となっている。それが、この者達が神話通りの神ではない事を物語っている。

『超能力者』という単語を聞きつけ守園が、クラスにいるある人物の名前を出す。

「それじゃ、あけち明智君も神様だったりして」

「明智？」

聞いた事の無い名前に、夜月は眉をひそめる。守園はうん、と頷いて、

「フルネームはあけちきょうた明智鏡太なんだけどね。今日はいなかったけど、普

段から居ると思つてるときに居なくて、居ないと思つてるときには居る・・・なんて言うか、変わつてるよ。いい人なんだけど」

確かにそれは変だ。

そう思つて夜月は頷く。それと、ようやくこいつも委員長らしい事をしたな、とも思う。

守園はそんな夜月の思いなど知らずに、死神の能力に興味を持ち始める。

「夜月君は死神なんだよね」

改めて尋ねられた夜月は、相手の意図は分からないが適当に「そうだけど」と返す。

「じゃあさ、あの『ノート』とか持つてたりするの？」

守園は、どちらかと言えば願望の色が強い視線を夜月に向ける。

その頭にあるのは、リングと悪戯が好きな粹なアイツである。

「あんな分かりやすいのは持つてねえよ。大体、俺らは人間にあまり干渉できないんだよ」

夜月のあつさりとした答えに、大いに期待していた守園は肩を落とすが、すぐに気持ちを立て直し、新たな質問を口にする。

「でも、私の事を殺しかけちゃったよね」

「あれは例外だよ。俺は人間としてお前と接してて、それからお前を悪魔にしてから生き返らせたからセーフ」

「私を悪魔にするのは？」

「あの生と死の狭間じゃ、神と人間の境界線が無くなるんでさあ」
ケルベロスが答え、守園はある程度の質問を解消し終わった。

そんな守園に夜月が逆に問いかける。

「他に質問は？」

「んー、特に無いかな。また思いついたら訊くよ」

そう言つて、守園はゆつくりと立ち上がった。

「それじゃ、もう帰るね」

「そうか。んじゃ、また明日」

続いて夜月も立ち上がり、ケルベロスもいわゆる『お座り』の状態

をやめる。

「お邪魔しましたー」

玄関で靴を履いて、守園が別れの挨拶をする。

「邪魔するなら帰れ、って昔よくやったな」

それを聞いて、夜月が余計な事を思い出した。

「やりやしたねー」

なぜか犬まで同意する。

「それじゃ明日、学校で」

「んじゃーなー」

玄関が開かれ、守園は夜月の家から出て行き、自分の家に戻った。それを見送った後、ケルベロスが真剣な口調で夜月に問いかける。

「旦那あ、一つ訊きやすが」

その声に夜月は深刻な響きを感じ取り、やや声を低くする。

「何だ？」

そしてケルベロスはひと呼吸置いて口を開き、

「晩飯は肉にして貰っていいですかい？」

と、夜月の予想を大きく外れた質問をした。

まじめになった夜月は激しく後悔し、家に入って財布とリードを持ってきた。

ケルベロスの首輪にリードを付けつつ、夜月はため息をつく。

「今日は魚な」

「ええっ！？ひでえ！」

ケルベロスの悲鳴も無視し、夜月は立ち上がって歩き出す。

意外にまともな新学期になりそうだな、と楽観的に考えながら。

「それにしても、死神とは驚いたなあ」

二階にある自分の部屋で、守園がくすくす笑いながらつぶやいた。彼女の視線は、窓から見える夜月とケルベロスに向けられている。自らを死神と名乗った少年。自らを冥府の番犬と名乗った黒犬。

彼らを眺めて、守園はふつと笑う。

「でもね、あんまり期待しない方がいいよ？」

ここからでは届かないと理解しつつも、守園は転校生に話しかける。

「少なくとも」

茶色い木目調のカーテンを閉め、壁際にあるベッドに腰掛け、天井を向いて夜月にはまだ見せた事の無い悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「『まともな新学期』は絶つつつつつつ対に来ないと思うから」
そのままベッドに倒れ込み、転校生に委員長としての言葉を投げかけた。

「我がクラスへようこそ！ま、楽しんでね？」

その言葉は、夜月には届かない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3587q/>

神々と世界の日常

2011年4月25日23時12分発行